◇講　演◇

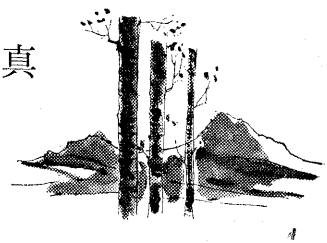
子どものあそびと自然

津守　真

幼児の発達に必要なのは、あそびの生活であって、そのあそびの基本的な要素は何か、といえば、子どもの自発性と、子どもをとりまく自然の環境であり、それをつくり、また、なしとげさせるものは、保育者の力であります。音楽の場合でも、あるいは描画や造形の場合でも、その他のことがらでも、幼児の問題をとりあつかう場合には、私は、同じことが考えられるだろうと思います。

もう一度、くりかえしますと、幼児期に非常に重要なのは、子どものあそびである。おとなの生活で、人がなにかいっしょうけんめいにうちこんで、時間もわすれ、あるいは、ごはんを食べたりするよりも、もっとおもしろくやれるような生活がある時にはおとなの労働でも仕事でも、あそびの要素をもってくるわけでありましょう。幼児の場合には、おとなのいうような、勤労の生活というものはありません。しかし、何かうちこんでやることができ、また、それをやることによって、もっとおもしろくなって、次の生活がそこから生みだされていくような生活がなければならないし、また幼児はそういう精神生活をもつような基本的な性質をもっております。そういう意味で、子どものあそびの生活は自発的である。だから、「あそばしてもらうあそび」と、子どもが自分からあそぶ「あそび」というのはたいへんちがうわけで、幼児に必要なのは、自分からあそぶ「あそび」だということがいえます。

それからまた、自然の環境が重要です。子どもは、むかしから自然の恩恵に浴して育ってきたのです。水であそぶ——今は夏で



すが、プールはこわがる子どもがあるけれど、小さな水たまりだとか、お風呂でバシャバシャやる水だとかは、よちよち歩きの子どもから、小学校の上級生ぐらいになるまで、子どもはほんとに好きである。それから、土と泥をこねてあそぶ、あるいは粘土をこねることを好みます。それから、あたたかいポカポカする太陽の下で、ほんとに心がなごんであそべる。それから戸外で、風や空気の中で子どもはかけまわり、それをたのしみます。

だけど、これだけいえばわかるように、私どもの都会の生活では、こういう子どものほんとに重要なあそびの材料（材料というよりもあそびの根本をなす環境）がどんどんなくなってしまって、水といっても、小川のせせらぎの水であそべる子どもなんていなくなってしまった。土といっても、どろんこあそびのできる幼稚園が、この中にどれだけあるでしょうか。お日さまや空気も、この数週間は、ずいぶん公害の問題がとりあげられているように、子どもが外で新鮮な空気を吸いながらかけまわることができなくなりつつあります。こんな根本的なものを子どもの生活に与えることができないで、幼児教育ということを考えるのはなさけなくなってしまいますが、こういうものが子どものあそびの地盤をなすのであって、これをまた子どもに回復してやらなければ、人間の成長が、へんてこになってしまうのではないでしょうか。

子どもの内側からわき出る生命の力をもって、子どもがとりくんでいくあそびをなしとげさせるものは、保育者の力である。保育者がいなかったならば、あそびはほんとにじゅうぶんに子どもの中に展開することができない。その意味で、幼児にとって、保育者というのは非常に重要なものであって、ほっておいて子どもはあそべるようになるとは、けっしていえないものであります。

このあそびを形づくっていく基本的な要素を、発達の角度からみたとき、身体運動感覚とそれに伴う精神的はたらきの重要さをいうことができるかと思います。たとえば、話ができるようになる以前の段階でも、子どもにはあそびというものがある。しかもまた、ことばがしゃべれない段階の時に、子どものあそびの非常に重要な部分が作られていくし、また、ことばがしゃべれるようになった幼稚園の子どもなどをみていても、ことばはいわばつけたしで、子どもがあそんでいる事柄の根本は、もっと、子どもがからだを動かしたり、手でさわったり、においをかいだり、からだでふれたりというようなことが中心をなしている。

砂場であそんでいるところをみても、砂場で子どもはいろいろなおしゃべりをしている。しかし、砂場でおしゃべりをしていることばだけを記録したとしても、それで子どものあそびはじゅう

ぶんに理解することはできません。子どもがそこで、手でさわったり、ふれたり、こねたり、いじったりすることが重要な部分なのだということをしっかりと理解しないと、子どもの砂あそびは理解できない。同じようなことが、いろいろなあそびについていえます。

ことばはたいへん重要であるけれども、ことば以前の、体全体で感じるような部分が非常に基本的な機能なのです。

私どもおとなの日常の例を思いだしてみても、実はそういうことがあります。たとえば、何か、あるなつかしい光景、自分の小さい時に育った家だとか、あるいは、昔、卒業した学校だとか、そういうふうなことを思い浮かべた時に、私どもが思いうかべるのは、学校の校舎であるとか、家のまわりの風景であるとかを目の中に思いうかべることができます。けれども、実は、なつかしい風景を思いうかべる時に、かならずしも視覚的イメージが主な事柄ではない。

もっと、われわれにとってなつかしさを呼ぶものは、目でみた視覚的な、まぶたのうらにうつるイメージではなくて、もっと、そのまわりをとりかこんで、かけまわったり、あるいは、木の幹にふれたような感じであったり、あるいは、人としゃべった、その自分がしゃべったあとに残った感情であったり、あるいは、においであったりというような、視覚よりももっとちがう感覚が、そこに伴っている。触覚、嗅覚、運動感覚、などを総合したようなものともいえるでしょう。

保育のことがらについても同じことがいえます。皆さんがいま、幼稚園のことを思いうかべて、そして「幼稚園で子どもといっしょにあそぶ時に、どんな指導をしたらいいですか」とたずねられた時、ことばではなかなか説明しきれないけれど、自分があの中に入ったら、こういうふうに動いて、こうやって、ああいうふうに手をだして、こういうようなものをそろえて、こういうふうにこういって、なんて、ことばではあらわしきれないが、何か、そこで体ごと自分がやるような感じとか、あるいは、ことばにあらわせないような感覚というものがそこで働いているでありましょう。ということは、つまり、保育というものが、われわれが頭で判断したり、理性で判断して、こうするんだということも大切ではありますけれども、またそれよりもさらに、その根本にわれわれがことばもつかわず、また、はっきりした意識をもった理屈もつかわないで、しかも、子どもの中に入って何かを感じとって動いていく、というような生活が根本にあるということも気がつくわけです。同じようなことが、子どもの生活にはもっとあるわけです。

子どもが、黒板の上に一本の線を書いた時に、われわれおとなは、これを一本の線だとみます。「あ、線が書けてるわね」といって見ます。ところが、子どもが一本、線をスーッと書く時に、それは、一本の線を書くために書いているということはたいへんすくない。おとなはそれを、視覚的に外側からみるけれど、子どもが一本の線を書く時には、相当、時間をかけて手をずーっと動かしていきます。それは動きをあらわしています。「ヒコーキが、ブーンと飛んでいるョ」と、ブーン、ブーンといいながら線を引いていく時には、結果としては一本の線がそこに残るけれども、子どもはそこに一本の線をみているのではなくて、ヒコーキがブーンと動いていく、その動きそのものがそこにあらわれていて、それが重要なのです。子どものこういう触運動感覚の世界においては、子どもの動きそのものが、直線になるということは、たいへんすくなくて、むしろ、それは円形になってきます。それは、体の生理的な、あるいは、解剖学的な性質からくるものかもしれない。子どもの線は、しぜんにまるくなっていきます。子どもは、線を書く時に、ぐるぐる動いて行く動きをそこに体験しますし、その動きは、じきに、子ども自身の中で、ぐるぐるまわって、うずまきのような形になって、子どもの錯画期の終点においては、子どもの絵は、ぐるぐるうずまき形をして、その一番真中のほうに、点をいくつかうちつけます。

錯画といわれるものはおとなからいえばめちゃくちゃがきであるけれども、子どもの精神の世界では、これはけっしてめちゃくちゃではない。もっと具体的なものを書く段階もおもしろいけれども、その以前に、もっと子どもが感覚でとらえたものを、率直にあらわしたものが、子どもの錯画の段階である。

今、私は絵の問題をきっかけにお話をしたのですが、私はすぐこれで、音楽のことを連想するわけであります。私は音楽の専門家ではありませんから、子どもの発達の角度から、音楽のことを考えるわけです。

子どもが体を動かして歩くとき、直線で歩くよりも、ぐるぐる円形をなして歩くほうが、もっと基本的な形でありましょう。子どもに、まっすぐに歩いてごらんなさいというと、これはなかなかむずかしくて、線路をまっすぐに敷いておいて、この上を歩いてごらんなさい、というのでなければまっすぐに歩くことはむずかしい。ただ歩いてごらんなさいというと、子どもは、部屋の中をぐるぐるうずまき型にまわって、しかもだんだん円がせばまってきて、小さくなってしまう。もっと大きくしなさいといわないと、大きくなっていかない。つまり、これは円においても、体の動きにおいても、一つの自然な、共通の傾向であろうかとも思い

ます。

そういうことを思ってみますと、たとえば、子どもの、体を動かす遊戯や、音楽をともなう遊戯などは、ぐるぐる円を作って、そして幾重にも同心円を作って、外側の円、中間の円、真中の円と、みんなでぐるぐると輪になっておどるようなおどりがたいへんおおい。これは子どもがたいへん喜びますし、それからまた、ずっと昔から音楽をともなうおどりというのは、円をなしていくものがおおい。先日学生さんといなかのほうにいった時に、盆おどりをみていて気がついたんですけれど、盆おどりでは、やっぱり、皆が同心円をなして、おどりながらぐるぐるまわります。そして、一番真中にたいこをたたく人がいます。

子どものめちゃくちゃ書きといわれる錯画に、円をぐるぐる書いて、そして一番まん中にいくつか点をうっていくようなものは、かなり一般的に共通にみられるのですが、そういうまん中に点をうっていくというのは、これは一つのリズムです。

視覚の領域と聴覚の領域、それは単に、視覚、聴覚ともいいがたい。もっとその両方に共通の、触運動的な空間というものがあるのではないかというようなことを、ここでみてくることができますし、また、音楽の問題についても、同様のことがいえるのではないかということを、私は連想するわけです。

子どもの自然の生活ということを申しましたが、子どもの触運動的感覚、あるいは、触運動的空間というのは、一つのまとまりをもった、そして中心にむかって動いていく傾向をもったものであり、その中心を求めて動いていく子どもの性質というものを、私どもはここで重視しなければならないのではないかと思う。子どもの、どの段階でも、それがきれいな円形をなし、中心をなしていくとはかぎりません。子どものある段階では、子どもは新しい要素に気がつくと、今まで書いていた絵とはちがった段階に、あるいは、新しい要素に気がついた子どもの精神生活は、そこで一度やぶれて、くずれます。やぶれた時に、そこで子どもはもう一度、その新しい要素をとり入れながら、自分で中心を求めて動いていきますが、その途中では、それがうまくいかなくて、まるでもつれた糸玉のような、あるいは、何を書いたのか自分でもわからないような混乱した精神状態を示す段階があります。

私どもは、その段階だけをみた時に、その子どもが反抗的であるとか、あるいは乱暴であるとか、あるいは何もしないとか、落着きがないとか、いろいろいいます。

しかしそれは、私どもが、外側から子どもの発達のある断面をみた時の、われわれの印象であるにほかならない。子ども自身は、じつは、そういう時ほど、自分みずからの精神の中心を求め

て、何ごとかを、たぐり求めて動いているものである。だから、参観者や外来者が、ちょっと幼稚園の部屋をのぞいて、そこで、この部屋は落着きがないとか、この部屋はどうだとか、批判をされると、幼稚園の先生は不満に思うでしょう。

これは当然であって、もっと長い流れの中でみてもらわなければ、とても理解されないだろうと思うし、また、その流れの中で、しかも子どもの精神生活の内面において、それを私どもが理解していく時には、その時に今度はどうしたらいいかという「ちえ」がおのずから出てくるものだろうと思います。

先ほど、めちゃくちゃ書きという錯画の段階の話をしましたが、美術教育というのはけっして、美術にかぎった教育ではありませんで、子ども時代の教育の一般的な問題にふれていくわけでありまして、それは、芸術のみの教育ではないし、また、芸術家の教育ではありません。そこに錯画の段階というのがあるように、音楽の段階でも、錯画(画というものは適当ではないが)の段階というのがあるのではないかと、私、久しく疑問に思っていました。絵のことでありますと、子どもの中から出てくるものをのばすとかいうようなことが非常にいわれてきましたし、またそのことの重要さが実地に示されているわけですが、音楽というと、いつでもすでにできあがったものを与える、というように考えやすい。

しかし、錯画に相当するものを、これからもなお、研究していく必要があるのではないでしょうか。それがどういうものであるか、私ははっきりと知りません。おそらく子どもの内面に満足を与え、しかも、おとなも子どももその中で何か共通に理解できるものができ、また、共通に楽しむことができるようなものであろうかと思います。

私どもは、子どもが、人間として成長し、発達していくのに役立つような教育をするにはどうしたらいいか、それをいっしょうけんめい考えていかなければならないので、それをやるには、理屈をこえて、共通にお互いに感じることができ、お互いにそこでふれあっていくことができるような教育が必要であり、音楽の面でも、同様であろうと思います。

私どもは、保育の中にある音楽の要素をしっかりと理解し、またそれを、子どもの全人的な発達に役立つような方向ですすめていかなければならないものであると思います。

(四十五年七月二十八日・コダーイシステム研究会の講演より)